

## 小域における新しい試み

——準農村におけるオピニオン・リーダーの開発とその改革(2)——

山 口 信 治

### Ⅲ—三 速野学区〇部落

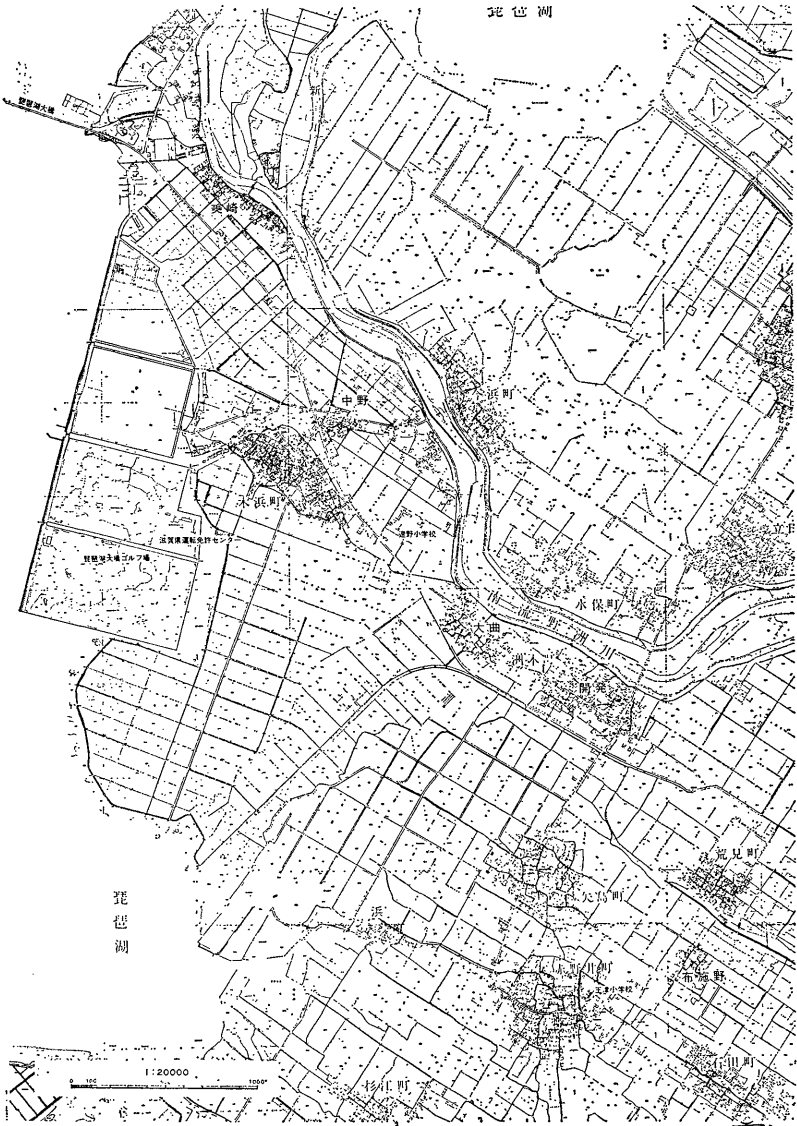
それでは次いで部落（おまがり）の様子について若干記述しておこうと思う。

野洲川の南流と法流（竜）川にはさまれ、東西のグリーンの静かなこくそう地帯である（図表(1)）。

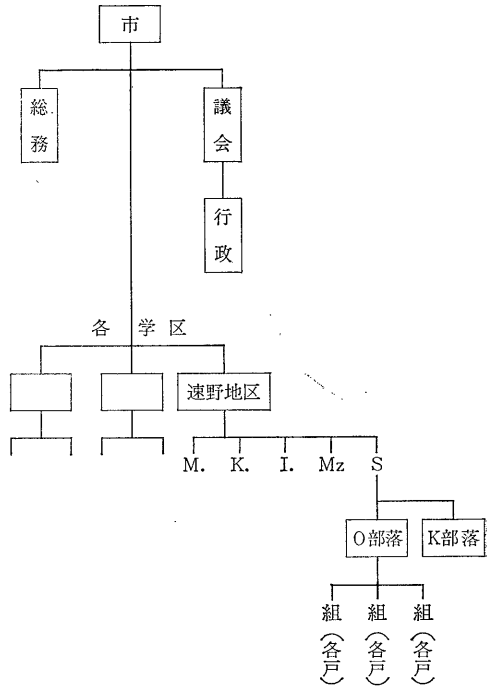
戦後まで戸数は六〇戸で変らなかつたが、戦後分家がおこり現在では八〇戸になっている。明治二十二年市制、町村制までは、それまでの藩制としての行政組織はムラであつた。以来、昭和十五年九月内務大臣訓令「部落会、町内会、隣保班等整備要領」により、また戦後二十二年四月「町内会、部落会の解散に関する政令」等の変遷を通して、この行政単位としてのムラが、現在の自治会「区」にそれを移した。

この自治会組織は十の下部の組（図表(2)——①②）よりそれぞれ一名役員を選出し、この十人の役員により自治会（役員会）運営がなされてきた。終戦当時までは一組十二戸からなりその組長がまわりもちでその任に当り諸々の連絡、回らん、今日では、有線、掲示板などで適ぎ行なわれている。

图表(1)



図表 (2-1)

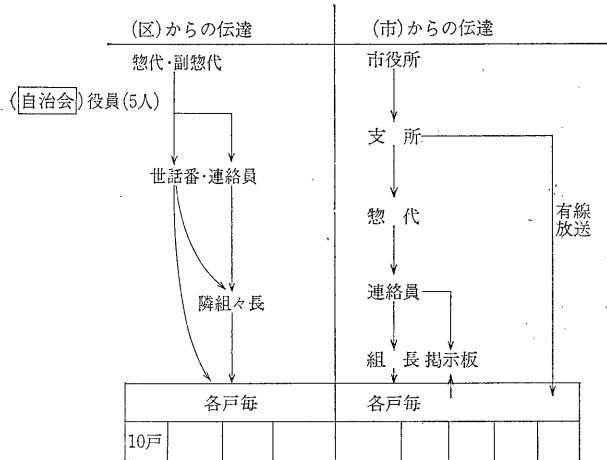


り、午後孫達が保育所から帰るまで、まさに老人ムラと化してしまふ。老人たちは各々庭の手入、畑の仕事、掃除、行商（仏花うり）、寄り合い、習いもの、家での手仕事（内職）など比較的忙しく体を動かして活動している。

若干市勢（『守山市勢』）のなかで述べたがおまがりにおける一戸当りの平均家族数は、しかもごく一般的な家族類型としては老夫妻、若夫妻と三人の孫の七人家族からなる三世代型大家族を呈している。世帯主が四〇～五〇才までの若年者核家族の層さらに六〇代にかけては、成人した長男が未婚でつとめに出ており、他の子ども達はつと

全戸主に農業で若い夫妻ともともかせぎに出ていた兼業農家である。従って家に残っている老人たちが家の留守番を兼ね孫たちのもり役を担っている。通常ムラの人口移動は朝七時から八時に活気づく。出勤する若夫妻たちにはじまり、次いで学童の通学、少し遅れて保育所に出掛ける幼児たちの食事、トイレをすませ、それぞれの老人たちが孫の手をひきひき送迎バスの停留所まで出向いてくる。こうして息子や嫁・孫たちを送り出してしまふと急にまた元の静けさがもど

図表 (2-2)



が居住するといった形をとるのが、老夫婦が別棟へという単独別居隠居の形態をとっていない、むしろ両夫婦が子供の居室をはさんで居住するという分住別居隠居の形に最も近いようだ。当然家長権、主婦権が子の世代に譲って隠居するわけだが、これに伴って定った儀式化した慣行などは残っていない。

めや大学などに就労、就学のためイエを離れており、従って家族数は平均より二、三人減じた四から五人家族をなしている。従って市街部に比べ三世代型の家族類形がもっともポピラーな形となっている。なかにはこの代表的な形をいくらか崩れた、例えば若い夫婦のどちらかを欠くいわゆる欠損家族と老夫婦が結合しているもの、さらには老人世帯だけの世帯あるいは老人と未婚の孫などあり、独居は比較的少くない。

従来イエ慣行として、受け継がれてきた家長権や夫婦権の譲渡はここ大曲でも今日ならわしとして一応存続し機能している。一般には、これを契機に老親の住居を別に移すいわゆる隠居慣行であるが、大曲では、子供と同一家敷内に住み母屋に老夫婦がそして若夫婦が別に家を建て増しをして移り住むか、又別に家敷内に家を建てるかして共同で住む。一応形のうえでは家を新築すか、それとも二階を建て増しして、その上に若夫婦

ごく一般には、しんじょうわたし、或はサイフ渡し、などで通用しているようだが、これも特別な呼称はない。戦前までは部落の戸数に余り変化なく、六〇戸を保ってきたが、これを境に少しづつ分家を出すようになり、現在では八〇戸にまで戸数が増加してきている。今日ではこの隠居慣行により形式的にはかつてのようなじやもじ（主婦権のシンボル）のぎょうぎょうしい受け渡しの式などなく、よほど旧家でない限りあまり形式ばったことは若ものたちから敬遠されているのが現状のようだ。したがってこの慣行も一応暗黙のうちに新しく家をつくりそこに老親が移ったその日が事実上、しやもじ渡し、になっているのではないかと思う。それでも田畑の分割、さい布渡し、を受け先祖からのムラの行事、仕事、隠居の義務などこの時期に口答で後目（息子）に引き継がれる。こうして一切の相続を後目に譲って身を引くわけだが、唯イエにまつわる祭事たとえば祖先の霊をまつるほんこさん（報恩講）などを含め一切の宗教行事についてはからだの許すかぎり年寄いたものたちのイエの役割として継続してゆくのが普通である。

次ぎに家庭生活のなかで重要な位置をしめ、唯一の家族の交流の場でもある食生活をみると、一応たてまえ上、世帯を分離して別々に食事を摂るようになっていく。従って台所なども別に備え付けてあるが実際はそれを使用せず、母屋の台所を共有している。事実上若夫婦ともに稼せぎのため外に出ているため家庭の管理一切が家に残された老人にまかされており、当然朝夕の仕度から片付まで、さらには孫達の栄養なども含めて一切まがされているのが実状である。とくに食事でトラブルをおこすことはない、祝日や日曜を除いてはすべてとし寄りの仕事となっており、インスタント食品を好む頃の子どもには多少我がままが通らず小さなトラブルをとし寄りや孫との間に起こる程度である。むしろ子ども達の発達にとって微好な身体や心の変化に伴なう微少な変化にもさすが四六日中間

わりをもっているため実にとぎすまされたカンをもってこれに対処している。言ってみれば一種の榮養コンサルタントとしての役目を立派に彼らは果たしているといつていい。

子授け、かいにん、安産祈願、犬のはら帶、出産、三日祝、名付け、宮参り、初節句、七五三、それに水子等々の慣行に関しては従来のようなことはないまでも、多分にその形をとどめている。とくに守山は信仰ぶかいことは前に何度も述べて来たところであるが、それを証すものに事欠くことはない。その一つが路端に居並ぶ子安かん音の石仏群である。開発に伴ないこれらが今では一ヶ所に集められているが、その数あますところ六〇数体にも及ぶであろう。それに刻まれたお顔が何百年もの風雪に耐え多少のくずれはやむを得ないが実に美しい。すべて信仰のふかさが刻り上げた心の集体といっても過言ではないだろう。しかもどの石仏にも赤い真新しい前だれが老人たちの手によって懸けられている。信仰ある人々によって寄進されたものだろうし、また雨露をしのぐための屋根もつけられ大事におまつりされているのも皆その証しだと思う。

やがて、一人まえぐになり成人すると、当地では、おにいちやんぐと呼ばれムラの重要な構成員となる。かつては男女別々にエイジグループがインフォーマルに組織され、それぞれ青年としての教育がムラの指導者らによってなされていたのだが、今日ではそのような宿り慣行は残っておらず、ただ古老たちの記憶のなかにのみ存続している。それが今日ではかたちを変え市が催す成人式に参列する程度となった。またこの辺でも広く分布している女性の通過儀礼のうちとくに大事なものは月経に関するものだが、その月小屋慣行も今日ではまったく見ることが出来ず、このことを語る老婆たちも少なくなつてしまつてゐる。

それに引きかえ、まだその役割を担えるものとしては、婚姻（ヘレ）をはじめ年祝い、厄年、さらには死去に伴

図表 (3)

老人会	60	老人会	氏子、 札所めぐり
壮年 (守山市給与所得者会議)	40	エルダリー	老人大学
青年団 消防団	25	婦人会 (白ゆり のぞみ)会	講 (おいせ)
子供会	15	子供会	地藏盆

男

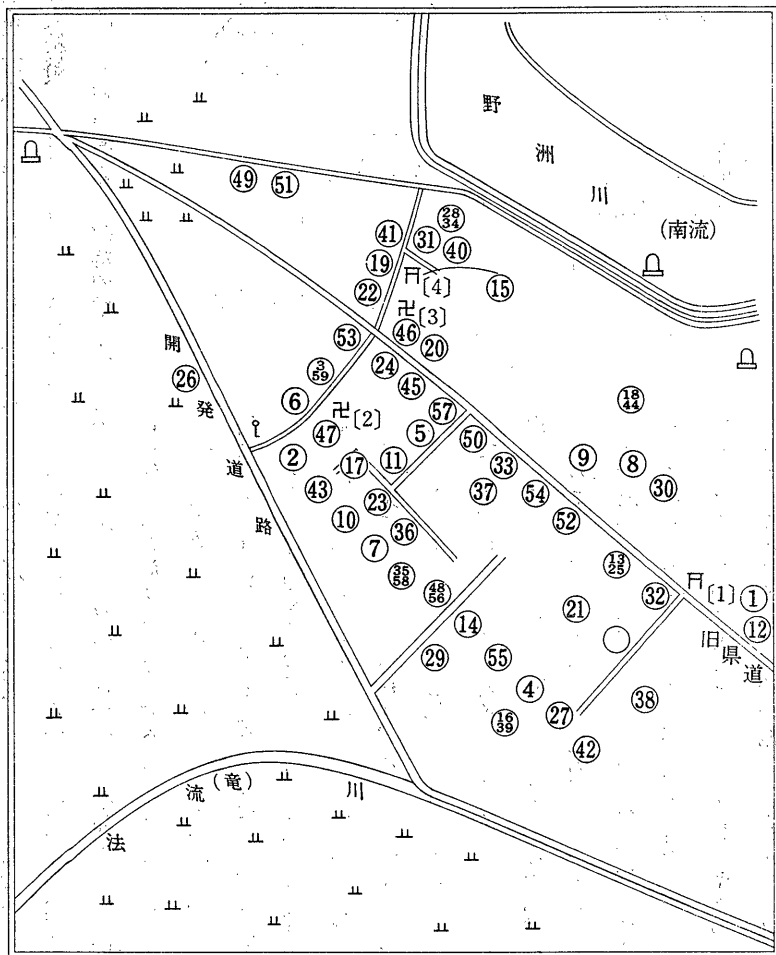
年令

女

なう通夜、葬式、野辺おくり、初七日、ほんこさんなどの冠婚葬祭は老人たちの独壇場である。まず婚姻だが、従来は仲人結婚、つまり見合いということになっていたが、とくにこの大曲では、米づくりなどの世襲などの理由から比較的その通婚圏が狭い部落内婚も決して少なくなかった。だが今日ではその範囲も大いに広げられる傾向をもち県外から来たり入ったりするようになっていく。

それでも尚、今日イエの相続人やその嫁ということになると、老夫婦にとってはきわめて重要な発言権をもち、くたしかな家の筋ぐをはずめとする世間態を気にしてチェックする。嫁やむこに出す場合でも、息子の場合にはその母親が、また娘の場合は父親が各々ついて嫁ぐさき先にあいさつに廻わり、きわめて儀礼的ではあるが細かいところまでタッチしている。これなどまさにイエという意識が多分に残存している証しだし、イエ対イエの名残りを根すよく残しているものと思われる。従ってハレに関する限り婚約、結納、婚礼等々も従来の慣行をそのまま、現代の子供たちに引き継ぎようとしていっていると言っている。次で厄年、年祝い、について述べるが、概して残っていると思う。とくに年祝いの還暦、古稀、喜寿、米寿などのお祝いことは部落あがての大きな行事のひとつとなっているし、ヤクの年などヤクばらい大々的に行なわれている。その他、エイジグループ(図表3)一応既存

図表（４） 部落図並びにクラブ員室



墓地 神社 寺 クラブ員宅

クラブ委員宅



のものでは男女共通のものとして「子供会」、「壮年者会」、「エルダリー」、それに「老人会」の四つのエーシグループをもっている。また別に女性の年令集団としては「婦人会」とそれに「未亡人会」（戦争・その他）二つを持っている。そのうちとくに活発なエーシグループとしては「子供会」、「婦人会」、「壮年者会」、「老人会」の四つといえよう。かつては「青年団」の役割りも決してすてたものでなかったが、とくに神社の祭事等々にはその役割を担ったものだが、最近では全くなくなってしまっているのがなんとも残念である。

現在、部落内（図表4）には円照寺（4―2）、照久寺（4―3）、玉林寺（4―4）、いずれも真宗派の三ヶ寺がある。円照寺は部落の北、野洲川（南流）の川すそに五〇ほどの柱、さらには照久寺は開発道路の南側に六〇柱の墓地をもつ。各戸（家）毎に墓地を所有して先祖代々の霊をおまつりしている。したがってまた通常みられる同族や、組毎の共同の墓地はない。一般に墓石が立派でかなり大きいのが特徴である。

石塔が主でそれには真宗にてかい名「釈……」「釈士……」と刻まれ、まぎれもなく真宗地を物語っている。

予兆（前兆）、これについては古老たちの伝承が若干あるが未だききとりをしていない。

信仰、真宗土壌であることははじめに述べた通りで、親鸞をはじめ、一辺、蓮如、一休などの大宗教家とともにの地はゆかりがあり、民衆の生活にその教えがしんとうしており、きわめて信仰心の盛んな土地柄である。とくに老人の生活の一端を支えている現在部落内には二つの神社と二つの仏寺をもち、かつては他宗派の布教活動も盛んで、特に学会のしやくぶくも盛んだったが、今ではそれも済んで一応元の静かな門徒の村に治っている。

また、「ほんこさん」と称する先祖代々の霊をなぐさめる報恩講の集いが殊の他盛んな土地である。

禁忌、（一）「Y宅の家敷内に安置されているイナリさまを最近建かえたが、その中から金泊の布に包まれた小箱が

出て来た」という話をきいた。子供たちはこれを解いて中味を見たがっていたが、とし寄りたちの忠告もあってそのまま治めたそうだ。その後ある占いにみてもらったところ偶然にもその話がでて、小包をあげなくてよかったと老婆たちはタブーについて語ってくれた。

(二) 死人の野辺おくりや葬式の車が通過するときには両方の親指を中に入れて他の指でこれをかくす慣習がある。  
(三) 忌に服しているときは一週間外出をしない。

(四) 動物のつきものたとえばへびつき、等々によるおそれ、その他「かっぱ」「龍」に関するタブーが古老たちによって語り伝えられている。

民間医療、とくにない。

その他部落内の特徴のひとつにおびただしい道祖神の存在であろう。現在は玉林寺隣りに屋根をおおい、凡そ二、三坪のところに道祖神凡そ六〇体以上を集めてあることを先きに述べたが、これなどまさしく信仰の地のシンボルととっていいであろう。

真宗土壌、照久寺(六六戸)、円照寺、玉林寺(戦没者の霊二十九柱、図表(4)―[4])

已爾神社(図表(4)―[1])その他守山には別院(東本願寺派)をはじめ宗教的風土をかもし出す寺院や仏教美術の数々をみることができる。とくに蓮如上人にまつわる。仏寿山聞光寺(守山町荒見)(石原教普氏住職)

部落図(図表(4))によっても理解されるとおり、現在部落内には、旧道がなくなり、それに代わる道路がほぼ部落の中央を東西に一本通っている。またそれとは別に部落の南側に昭和四三年完成をみた土地の再開発と法流(竜)川の開発に伴ない、この堀割りぞいに守山と栗東、東名高速、さらには湖西を琵琶湖大橋で結ぶ二車線の巾広い道

図表(5) 部落内の交通

第 1 回 調 査	週 末 (12—12.20) 天気くもり	日曜日 (12—10.00) ハレ	夕 方 (16.00— 16.20)ハレ	9.00—9.20 普 (朝)	16—16.20 (夕)
通 行 人 (人)	4	15	10		15
農 具 を ひ い て (台)	1	—	—		2
自 転 車 //	19	15	20		20
バ イ ク //	3	5	5	5	4
小 ト ラ ッ ク //	12	4	15		10
自 家 用 //	9	15	25		5
大 型 ダ ンプ //	ときどき				

小域における新しい試み

路を完成させた。

とくに、この開発道路は部落と農場を交わる道路でもあって、その農作業時の農機（トラクター、コンバインダー）等々の移動には、この道路を横切らねばならない。最近とくに車の通行量が増し守山西部の（ベッドタウン宅地壊成）に伴ない大型トラック等速度制限（五〇km/h）を越えて走行するため、地元住民にとってはきわめて危機意識をもっている。最近そうした予想が適中し部落住人の事故死という痛ましい事故を起してしまった、住民運動にもなりようやく市が点滅信号機をつけ終止符を打った。だが開発のつけが地元住人にまわって来たことにいささか悪い感情をもっているは確かだ。それでもなお、この開発道路が東は大橋を渡って湖西線に京都や能登、山陰、北陸への連絡路、また西は東名のインターチェンジに通じているため祝祭日の如きは、この開発道路も都会なみの渋滞ぶりをみせる、やむなく部落内の生活道路を通過することになり、とくに午後の買もの時には車の列をなすほどつづき老人・子供にとってはきわめて危険な時間場所となっている。そこで日頃の部落内の交通量調べを図表（5）に示したので参照されたい。

買物、買物行動については、ほぼ地元か守山町内ですませていることがわかる。部落内には雑貨店、食料品店、果実・野菜店を営む店が一軒あるだけ

で、その他は酒店（塩）一軒、タバコ屋一軒、パーマ（美容）各々一軒、但しトコ屋は部落内に一軒もない、老人たちは守山か隣部落の開発（かいほつ）に行く、牛乳店一軒となっている。

家・屋敷、門がまえと倉をもつ家が多くその屋根は切妻型の平家もしくは木造二階建の（新築）家で、前庭をもち、大小の植木、石などで庭をつくり、屋敷の周りには石垣、生垣などでへいをめぐらしている。

母屋の仏間には主として年老いた親が新築の二階や別棟に若夫婦もしくは孫たちの部屋を作って住んでいるが。野洲川の氾濫に備えてかいく分高床とし縁やゆか下を高くとっている。凡そ床から土間までの高さが五〇〜六〇cmもあり、老人や子供には少々高いようだ。どの家も広い玄関をもち、玄関の隣りに応接間をかまえ、ゴージャスなリビングセットと書棚が備えている。おおむね母屋の玄関の出入口の近くには外便所（男子用）がある。くみ取式、二・三坪ほどもある土間の台所、どの家にも台所の守る守護神、火の神と井戸神がまつられている。たきがまつ、それにプロパンガスのバーナー、大小二台、風呂は外たき用ごえもん型、燃料は、まき、ガス兼用出来るようにしている。庭には野菜や仏花を主にした花が年中植え込まれ、いちぢく、梅、柿などの大きな果実樹も二、三本屋敷内にはみられる。家畜に替って番犬以外おらず、どこの家でも赤すずめを飼っている。収穫後農機械（一機一五〇万円もするもの二台）テントをかけて庭に治めてある。それに作業小屋と納屋をもち、各々収穫物の集取に当たっている。車は小型トラックを合わせて二台。一台は息子の通勤用に使っているが、他は嫁か中には老人でも運転するものがあり、老人の何人かは未だバイクを利用して活動している。

未だ上下水の工事が完成しておらず、便所は水洗ではない。それに引きかえどの家にも立派な給湯設備を備えられており、台所、風呂、洗面所に給湯している。また室内には、冷房器を備えているところは割合に少ないが、冬

期の暖房には万全をきし燈油でヒーティングが行なわれている、応接間と、共同食堂にはガスヒーターなどが用いられており比較的暖かくしている。また、昼の間は大きなコタツを備えて暖をとっている。

姓、現在、部落内には六つの姓があるが、もつとも多いのは山本姓がトップで二四戸、次いで大井姓（八）、遠藤姓（四）、勝見姓（三）その他となっている。老人会だけをとっても、山本姓を名のものが圧倒的に多く二十四戸会員に登録し、次いで大井六の順となっている。

今回、われわれは老人の食摂調査をこの期間中に実施した。これについては、後方詳細に述べるとするが、差し当り、部落内での食習慣としての、ハレやケについて述べたいが十分に資料を整理していないので、これもまた次会に報告することにした。ただ調査項目のみを記しておくことにする。

- (イ) 食物の種類。
- (ロ) 調理の仕方。
- (ハ) 食器。
- (ニ) 食事の回数。
- (ホ) 間食。
- (ヘ) 主・副食。
- (ト) 食べる場所。
- (フ) 庭。

(1) 時間。

(2) 共同炊食、共同労働。

(3) 保存、保存食。

(4) 弁当。

(5) 食後の片づけ、準備。

(6) 嗜好品、タバコ、酒、茶、菓子、果物。

その他 飢饉時の食物。さらに食事に伴う座席の定位置。

イ、着物、ハレ着。

ロ、普段着、性別・年令別着衣 老人 女①モンペ ②きもの

男③Yシャツ ④ズボン(夏—ジーンズ)

ハ、仕事着、のら作事の場合男女共に顔に手拭でほうかぶりをする。

集会 (一)子供会、部落内の子安(くり人観音)をまつり、子供たちの安全を祈願する。とくに地藏盆、(九月)

には盛大にこれを行なう。

(二)婦人会、定例会を月に一度、部落内の農協で開催。

(三)老人会、例会には、部落内の已爾神社にて月一回行なう。その日は月のはじめ(一日)をこれにきめ、時間は朝九時三十分少なくとも十時前には已爾の神社に集まり、草とり、掃除などを三十分程度してから、老人会をはじめている。現在六十歳以上の老人を会員にしているが六十余名、会長Eh氏(昭和五年より)。

現在、市には、社会福祉協議会のもとに（吉身町）五四クラブ（三二三八人）をもっている。現在M市の老人クラブ会長は地元開発のKa i氏。

氏子 集団、総代Yかこじ、清重、雄三、六治郎。

道路事情、ちなみに踏査の期間中、数回部落内の旧役場前に立って、その交通量をしらべてみたのが、次の図表(5)の通りである。

#### 社会福祉資源

・集会所 一、おまがり老人会館（已爾神社境内）、二十坪集会室、十二畳二間、台所、手洗。

二、旧会館、農協、たたみ二十畳、台所、手洗。

三、小学校（速野小学校）兼選挙時の投票所、立会演説会場。

四、市民いこいの広場（グラウンド） 子供ブランコ、ジャングルジム、スベリ台、砂場

大人用バレーコート 一面、年寄り衆のための長イス 五脚用意

夜間 照明可（一五〇—二〇〇坪）。

・役場、北公民館（かつては部落内に支所があったが現在使われていない）、福祉事務所。

・部落会（町内会組織）

町内会、老人会、エルダリー、婦人会、未亡人会（白ゆり会）、壮年会（守山所得者会議メンバー）、子

供会。

・玉津老人センター。

・老人いこいの家 守山市石田町七三五―三

とくにとしよりのレヂャーとして今はやりのゲートボールは五二年以来部落内のオープンスペースや小学校の校庭を使って盛んに行なわれている。

揭示物 一、多賀神社より金銀婚者の祝い「長寿命の長寿を祈り申し上げます」。

二、いものかね運動のポスター

三、十一月十二日、十三日 報恩講、円照寺説法 宮下正謙氏。

四、「毎月二日は、感謝の日です」

五、「みんなで、いたわりの手を」

六、老人福祉月間のポスター。

こうした揭示物でここ守山の特徴は標語が目立って多いことであろう。交通のマナーから青少年の指導、同和問題、家庭の日、老人等々あらゆる年令別の地域活動が標語になって公けにされているところである。

### Ⅲ―四 おまがりの老人たち―老人会とその活動―

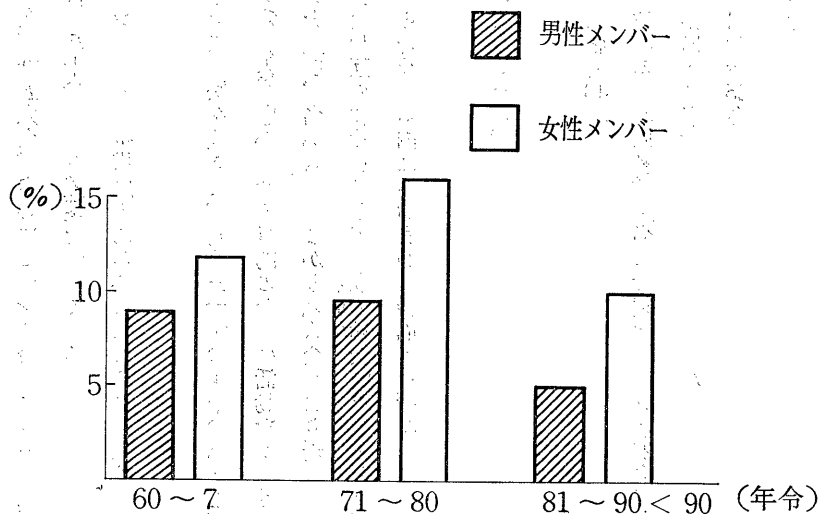
同地区における老人会結成は、昭和四十九年に先に述べた当時社会教育の任に当たっていた、J Ki氏らの指導のもとに組織されたものだ。以来、三代目会長を重ね現在、E b氏のもとに会が盛んに運営されている。若干、おまがり老人会について説明しておくが、まずメンバーの資格は、一応老人会規定により年令の制限を、六十歳以上としている。従って今回我々がおまがりのサンプルとして選んだ老人が、全員老人会のメンバーということになる。



図表(6-1)

年 令 \ 性 別	老 人 会 員 数			今回調査数(有効票)			各年令別 サンプル
	T	f (女)	m (男)	f (女)	m (男)	T	
60 - 64	3	3	0	0	0	0	0
65 - 69	16	9	7	7	2	9	56.3
70 - 74	15	11	4	8	3	11	73.3
75 - 79	10	5	5	3	3	6	60.0
80 - 84	11	7	4	2	2	4	36.4
85 - 90	4	3	1	1	1	2	50.0
90 -	0	0	0	0	0	0	0
	59	38	21	21	11	32	
性別によるサンプル				55.3	52.4	54.2	=(32/59)

図表(6-2)



男女別実数(図表⑥①)は男性会員の三八名、女性二一名、計五九名、さらにこれを年令別にみると図⑥②、に示した如く、男女ともに七十代をピークに左右に、六十代、八十代につり鐘型を示している。

しかも、六十代、八十代が男女共に差がなく、極めてメンバーの年令構成上ある年代に偏ることなく、つり合いがとれているようにおもえる。

最長老Y.Y.氏(九十歳)をはじめ、大正一けた代の新会員三姉妹を迎えて、凡そ三十年の年令の開きと明治・大正という世代の開きをもつ「老人と」というエイジグループ(年令集団)が一つの目的のために活動をつづけている。

老人会(おまがり老人会)の結成 三代目会長にE.h氏を選び、名称も「おまがり老人会」より老人会結成以来の世話役石原教督(守山仏教会々長)氏の発案により、会員相互の親睦をきして「朋の輪会」と改め昭和五一・五年の活動を出発した。尚会場も旧農協会館(集会所)から神社の境内に「おまがり会館」を新築しここに集会場を移した。

因みに、過去一ケ年のプログラムを紹介すると、以下のようになる。

(自、昭和52年1月至、同年12月3日)

- 1、1月17日 於速野会館 石原教督講話 出席者43名。
- 2、2月1日 大曲老人会を「大曲朋の輪会」と名称を改める。石原教督(名づけ親) 出席者25名。
- 3、3月2日 講話 石原教督 出席者30名。
- 4、4月1日 老人の幸せと老人福祉 岡田繁雄 出席者25名。
- 5、5月1日 体と心の健康 吉田、山口各講師。

6、6月1日	ポックリ信仰	山口信治	出席者32名。
7、7月1日	老人の三つの顔	山口信治	出席者37名。
8、8月1日	おどり	奥野講師	出席者40名。
9、9月1日	おどり	善野講師	出席者30名。

10、  
11、  
(例会)

12、12月3日 人工長寿時代シリーズ 第一日目 出席者23名。

尚二月の例会よりは会場を大曲会館とする。

参考のため会員の出席数を入れておいたが、結成以来常時出席者は凡そ会員の半数(現会長の話し)、吉田らをはじめ我々「守山エウルエイジング」のメンバーの参加により出席者の数も除々に増加する傾向をみるに至った。当然気候のせいも大いに関係してのことであろうと思うが、会長の言によれば「出席している人は、いつも出席しているが今回増えていることは日頃めったに出席していない会員たちの出席が、目立って増していることだ」とうれしい知らせを伝えてくれた。

日常の健康状態(図表7①②参照)

男女ともに身長は比較的低い。平均一四〇・五センチメートル、やややせがたで筋肉質、尚六十代から後半の女性に多くみられる背中や腰の曲がりこれが目立つ。彼女達の重労働を証していると思える。また高令に伴なって歩行困難なものが多く、その補助具として、使い古したおば車などを押しながら日常活動をしている。従ってこの補助

[illegible]

具類を使つての行動も限られておりその行動半径も部落内に限られている。特に老人会の中核である年令七〇〜七五歳までの会員たちは、きわめて健康状態「上」でその大半は、家一般それに仕事、買物などに、現役で活躍している。その他バイクや自動車に乗るものもありその行動半径は広い。ただ今回の踏査で知りえたことでは要介護老人が三名いた。しかも全員半年以上のねたきりの状態にある。内、若い嫁によつて介助を受けている老人一人、実の娘にしてもらつてゐる老人が一人、公けのホームヘルパー（Home helper）の介護を受けてゐる者が一人となっている。ただ、その内、失禁をある老人は唯一人で他のものは、大なり小なり自分で下の仕末が出来る老人達である。従つて全面的な介助者は現在一人であるが、要保護老人の予備軍は会員中には相等数いる。その他、身体障害が一人現在家族の介護をうけている。（その嫁の介護は部落内ではもつかのところも、はんとなつてゐる）にもかかわらず、多かれ少なかれ、失禁やねたきりへの抵抗を示す老人会員が少くないこともつけ加えておいていいことであらう。

男女とも概して体格はやや小さ目だが、目はするどいものを持つてゐる。日常の動作などまことにびんしょうで手先きがきょうで仕事が早い。従つてまた、たいがいの日常の生活にはこと欠かない状態である。それでも永いこと水の仕事の多かったせいかリウマチスに病む老人達が少なくない。とくに冬期などには、その関節にいたみを訴えるものが多い、ひざにぶ厚い布地（ふあつち）を当てるのが見るものに痛々しい。

性格はいたつて重労働にもめげず楽天家で明るい。年令の割には実に若々しい感じをもつてゐる。とくに声などはハリがあつて、若者のそれに負けてはいない。そこで「うた」や「うたい」「しぎん」に精を出してゐる会員もいる。多少男性のような低い声だがその声にはハリがあり、日常比較的大きな声で話しをするのが特徴である。

これはまた、集団生活の恵知なのかも知れぬが、つまり人に誤解されないためにも、大きな声で話すのだと古老が話してくれたことからわかる。

生活時間の構造は、季節により若干異なるようだが、平均して春期は冬期に比べて氣候の關係からだとおもうが、早おきで活動する時間が長く一〜二時間の差がある。ただし、今回の調査では、性別年齢による有意な差がなかった。

まず起床だが、だいたいの会員たちは、朝の五時三十分頃には目をさまし一日の活動をはじめ。男女つまり性別や年齢による差がないと始めにこわったが、若干、男性より女性のコーホーズに、あるいはまた、年齢の若いものよりいくらか年のとった高令者群に早起が目立っている。もち論、健康の度合により異なるものとおもわれるが、大半の者は目をさましてから、実際床を離れるまでに要する時間が凡そ三〇分ぐらいかけている。これは、また彼らの健康状態の項で述べるがリニューマチなどで骨や関節のいたみと無關係ではない。彼らは、床を離れるまで床のなかで半時程、血液のじゅんかんを良くするためのマッサージや体操をして充分体を温めてから床を離れるため、それに要するものである。そこでSOやUOさんのケースを紹介してみようと思う。まずふとんから外に出ている部分つまり顔や頭をたわしや手でマッサージをする。つづいて左右の首すじから背すじにかけて皮ふが真赤になるまでさらに十念に手指の先を両手でもみ温める。それが終わると片足ずつ曲げは両手で太ももから足のつま先まで、特にひざの関節には十分にマッサージをして血液の循環をよくする。これを彼らの言葉によると、「血液をあたためて体のあちらこちらに栄養を送り、またそこからロウハイブツを運び去ること」だと。老人会で学んだ健康法だとして実行している。こうして半時ほど床のなかで準備体操やらをしてから床を離れ一日の仕事をはじ

める。充分体が暖まったところで次は身のまわりの仕事、床あげ、洗面をすませますがすがしい気持ちで朝のおつとめとも言われる、神仏への朝まいりをする。まず大神宮に水とあかりをあげて家族の安泰を感謝祈願し併せ祖先の霊に手を合わせる。天候さえ良ければ、日の出を待つて二上山（近江富士）に登る朝日に手を合わせたり、部落内の神社に朝詣りに出掛ける。これが彼らの日課となっているようだ。それが終ると若夫婦の出勤にあわせて彼らを送り出すまでの一時あわただしさを増す。次いで次ぎに起きた孫たちの準備においまくられる、母親に代って着物のきせかえから、洗面、食事、トイレなど登校前の準備を手伝う。また祖母が母親に代って朝のしたく一切を引き受けている者もいる。ようやく若夫婦を送り出して、一息ついた頃次は学校に出かける孫たちの世話にかかる。最後に幼児と一緒に朝食をとり、保育所からの迎えのバスに乗りおくれないように連て出る。出る前の持ちものの点検、それに、バスの停留所まで見送りというあわただしさである。ようやく一人になれるのが八時過ぎになる。連続テレビ小説はそんな具合で見送り昼の時間帯にみるようになる。

半時ないしは一時間ほど体を休ませたあと、老人たちの第三の生活時間や空間をつくる。すなわち女性であれば朝食の後片づけ、掃除、洗たくに。男性にあつては、庭の手入れなどなど、ぼつぼつと重い腰をあげて体を動かすためのエンジンを始動しはじめる。日が高くなる頃畑に出掛けて仕事をする第四の老人の人口移動がはじまる。むしろこれには一定のパターンが出来上っている（ルーティーン化）といつていいのだが、凡そ十時すぎがその基点となっている。ただ例外であるようだが、年寄衆のなかには朝はやくから行商にでたり、新聞や牛乳の配達をしたりしている者が何人かいる。その大半は養育期の子供や孫のいない家庭で、しかも元氣な身軽な老人たちである。趣味と実益をかねており何がしかの収入を得られるという点では家庭内でのステイタスは高い。一週間のスケジュ

ールを立ててそれに従って行動している。また第五の行動は午前中病院や医院などに治療のため通院するとし寄りたちがある。バスや車で送られる。第六の老人たちは四六日中何もしないとし寄りとハカスバウンテット、家にくくりつけられて一步も外出できない老人、ただ屋敷内を歩く老人、イエの前まで、さらにはおば車でムラの通りまで出てくる者、様々な行動をこまかく見ることが出来る。そうして昼食時には帰宅してテレビにスイッチを入れ昼食を摂る。たとえ男性であっても汁もの程度は火をつけて沸かし嫁が用意していったものに箸をつける。老人達の中には親しい者同志が集って昼食をとるものもある。食後は小一時間ほど休息、テレビを見たり、新聞に目を通したりして過ごす、その後は個人によってまちまちである。とくに、夏のあつい日中は仕事をさけて昼寝をしたりして小休止をとる。冬でもコタツに体を横にして寝ころんでいる。昼食後は個人個人異なりプライベートな時間に当たっている者が多い。習いもの（おけいこごと）をするもの、着物の内職をするもの、畑仕事に出掛けるもの、未亡人会の会合に出席する者、さらには地域活動に自主的に参加するもの。とくに女性群ではお茶のみ友達が集ってよもやま話しに花を咲かせて時をすごすものが少なくないようだ。

したがって午後の時間の使い方は性別によっても大きく違っている。例えば、男性に比べて女性は仕事より習いごと、書道、花、詩、うたい、などの学習に時間を費しているのに、男性は田や畑の仕事がどうしても主になる。またお寺や神社の手伝いに出掛けるもの、家の用事でかなり遠方に用たしに出る者など比較的多忙。また、女性の半数は家で着物の内職をしており、しかも平均これに四〇五時間を費やしている。

原則として家事一般については性別による分業がはっきりしている。一般に男性より女性の方が家事をふくめ、畑仕事等々こまめに体を動しているようにおもえる。したがって用のない男性どもは神社の境内や広場にたむろし



てあれこれとだべったりして時を費やす。ところがそうした活動も孫の帰宅で様相を一変する。保育所からの帰りが三時半にはじまり、学童も五時頃には学校から帰って来る。女性は買物や夕食の事に、男性は風呂のまきわりやら風呂の準備にとりかかる。そうして食事まえには一風呂汗を流す。夕食は家庭により、また若夫婦の帰宅時間により異なるが、一般には小さい子供たちのいる家庭でしかも嫁が出ているところでは、夕食の仕度はこの老女性が一手にとりしきって準備をしている。老人、子供たちは先きに夕食をすませ、息子達の帰りを待つが、なかにはなにもせず、必ず若い嫁が帰ってから仕度をするところもあり、夕方の仕度は嫁の仕事とはっきり分胆している家庭がそれである。

多くの主婦たちはその帰りがおそく、子供たちと夕食とともに出来ない家庭が少くない。そうした家庭ではその代償として日曜や祭日などその分をうめ合わせるための接触を考えて、一緒に食事ができるよう若い夫婦がうでをふるったり、時には外食をしたりしてスキンシップを計っている。どうしても老人たちの接触が時間的にも、物理的にも多いため多少の情緒にトラブルをもつ子も少くないようだ。夕食後のひと時は若夫婦子供、各々自分達の部屋にもどり年寄りの子供とテレビをみて過し、夜ねるときも小学校低学年の子供たちは年寄りと一緒にねているようである。こうした訳は老夫婦一緒に床をとることは少なく別々休んでいる。

最後に年寄りの生活時間で、夜放尿のためにおきる回数と時間も無視してはならない。今回の調査では、全く無いと答えたものが春期で三十パーセント、三ないし四回が二パーセントとなっている。若干季節により変わるが、冬期では十パーセントほどある。つまり、一割ほど夜尿のため起ないものが増えている。また、一ないし二回のものも五パーセント、三ないし四回おきる者が五パーセントづつ減っていることが分かる。

図表(7-2)

	記号	生年月日	年齢	性別		家族構成			調査可	調査不可	reject (拒)	ヒアリング(聴覚)	シーイング(視覚)	ムービング(可動性)	ADL	
				男	女	有配偶者	無配偶者	独居				(+) 0 (-) 補助具エアホーン	(+) 0 (-)	(+) 0 (-) 手 仕事・歩行 足	SD	腰の湾曲
31	Edy	M38	73			28										A
32	Suy	"	"													
33	H.y	M39	72													
34	KuO	"	"													
35	GiU	M40	71													
36	H.E	"	"													A
37	SoE	"	"													A
38	AK	"	"			16										A
39	TN	"	"													A
40	SuU	"	"													A
41	IE	M41	70													A
42	KiO	"	"													C
43	HK	"	"													A
44	UT	"	"													
45	TH	"	"													
46	GtU	M42	69													
47	KyU	"	"													
48	TaU	M43	68													
49	HaK	"	"													
50	NO	"	"													B
51	HI	"	"													C
52	KK	"	"													A
53	UuU	M44	67													
54	HA	M45	66													
55	TkU	"	66													
56	NU	MT1	"													
57	ET	MT2	"													
58	HtU	"	"													
59	KnU	"	"													

自動車運転  
 ①:自転車  
 ②:自転車  
 ③:自転車  
 ④:自転車  
 ⑤:バイク  
 ⑥:新聞配達  
 ⑦:仏花行商

死亡

サ

+

また、一回におきている時間だが平均して5分程度である。とはいえ先程述べた手洗いが外にあったり、北側にあったりして、体がひえその体温の急激な変化によりたおれる老人も少なからずいる。その点今後考慮を要することの一つでもある。次いで、一応の彼らの健康状態を知る上で若干の指標をつくってみた。

図表⑦①②がそれだが、今回調査出来た者よりADLの指標を用いて一般化すれば良かったが、それが出来ず今回は、若干その活動の容易なもの、困難なものを三残階に分け、0点の左側が良好なる状態を示し、その右に若干の支障を伴うものをプロットすることにした。また、その右側に補助具として使用しているものがあれば、それを記することにした。

### III—五 守山市制「新しい田園都市構想」と老人諸対策

「万国博覧会」の年（昭四五）新守山市制がひかれた。これは新しい地方自治の課題を担おう。住民の福祉を計るべきもので、従来のよさに一段と高い地方行政を展開するためのものであった。即ちこれが「守山市総合発展計画」である。同計画は昭和六十年をメドに基本構想、基本計画、実施計画の三部からなるもので、まさに守山の未来図である。これがぼう頭に挙げた、守山の標語々高い教育文化とたくましい体力のみちたまちづくり々市民のくつろげる楽しいまちづくり々とを併行させるものだ。

この計画のモデルは、すでに、昭和三十九年北川町政時代の「開発事業」「教育施設」「環境整備」それに「産業振興」の四本の柱に市民の文化生活を入れ五本の柱からなるものであった。その一つ、「琵琶湖総合開発計画」は水資源総合開発事業として開始された。さらに昭和三十年守山町合併により、翌三十一年、町議会決議「都市計画

法適用地域」の指示申請、昭和三十四年、国より指定をうける。昭和四十三年「都市計画法」にもとづき、守山町都市計画審議会がおかれ、地区内の住宅、商業、準工業、工業等々の開発地域を定めた。強いては市街化区域と、市街化調整区域とに大別して、秩序ある町づくりをねらったものだ。さし当り、街路の整備、琵琶湖大橋の現実化、木浜湖岸の埋立、河川の改修等々の事業をすするに至った。さらには庁舎、公民館の建設、昭和四十年八月、今日の庁舎、総合ビルと中央公民館とが竣工、その他消防署、湖南消防組合が新たに組織され防火体制を整えた。やがて昭和四十五年には市街化区域と市街化調整区域とのいわゆる線引きが実施された。「農業振興地域整備に関する法」により、二、四七十ヘクタールが指定。市はその機会に「のどかな田園都市」の構想を発表するに至った。

ようやく、念願の野洲川の改修を昭和五十四年七月二日完了した。この間「成人病センター」をはじめ、守山病院、整肢園、母子健康センター、さらに湖南伝染病舎組合などの医療施設の整備をし、名実ともに住民の健康を守るまちづくりに着々と整備の手が入られてきた。さらに、この河川敷の後地利用して先日の「田園都市構想案」が具体化することになるが、合わせ我々の研究会「ウェルエイジング」の提唱するマスタープラン「デーケアセンター」の計画導入に新しい意味をそえる時期となった。

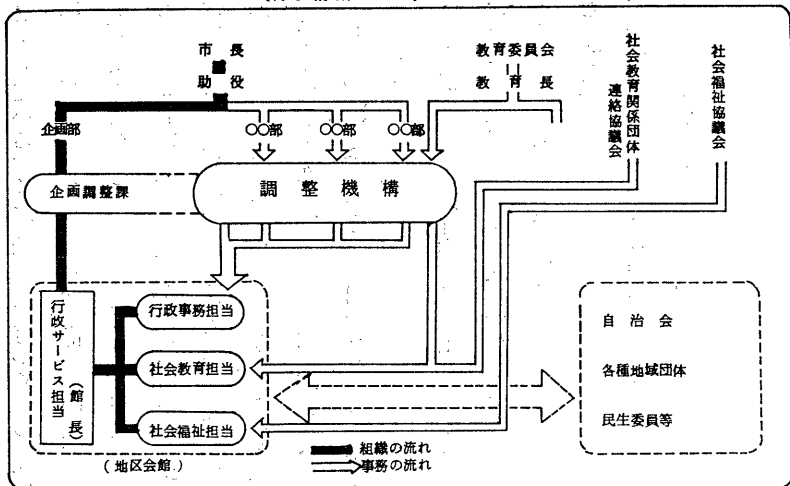
新しい「田園都市計画」とは

これは「守山市史」や、市が昭和五十一年「調和のとれたのどかな田園都市を」で発表した田園都市構想である。

今その中より、基本について若干ふれておく。つまりその第一条には、まず守山を伝統と創造のまちに再開発す

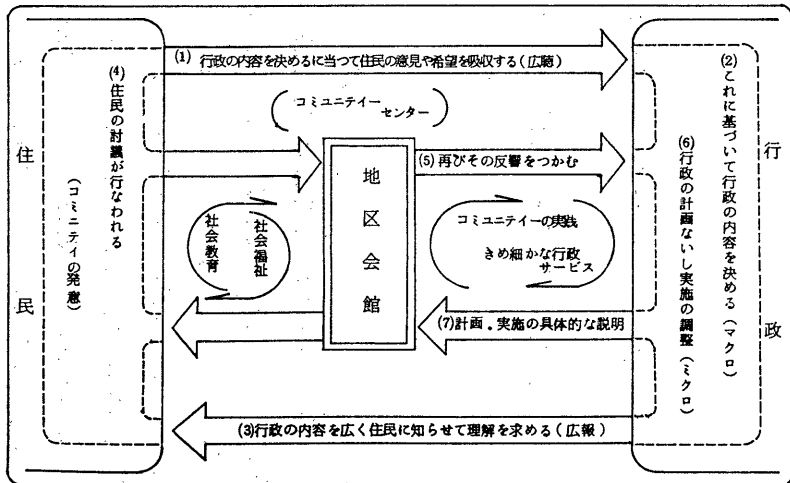
図表（8-1）

（行政情報の流れ）



図表（8-2）

（地区会館展開図）



ることをうたっている。第二は、その町づくりの主体が清潔で人間味のある市政を確立することだとして、さしずめ、市はこの時代の流れに沿った安定成長と開発優先から、福祉優先への施策の大転換をふまえて、その市政のあり方（責務）（対話行政）についてこれを規定している。第三はその「田園都市」がのどかな調和のとれた都市を指向するもので、それを青い空と美しい水と緑々に表徴されている。以上のことをふまえて以下に述べる八つの施策を挙げている。すなわち、(1) 治水対策、(2) 都市・農業・土木・河川などの基盤整備、(3) 琵琶湖総合開発事業の促進に伴ない、より良い環境づくりとその保全、整備を図ること、(4) 市民の健康管理と医療機関との連携とくに救急医療体制の推進、(5) 教育と福祉の対策、(6) 商工、(7) 住宅、(8) 公共料金の改訂等々を挙げている。図表(8)―①②は「のどかな田園プラン」を実施するための行政組織を示したものである。(行政情報の流れ)昭和五十一年度

滋賀県老人福祉課の事業計画予算(昭五一年四月)から

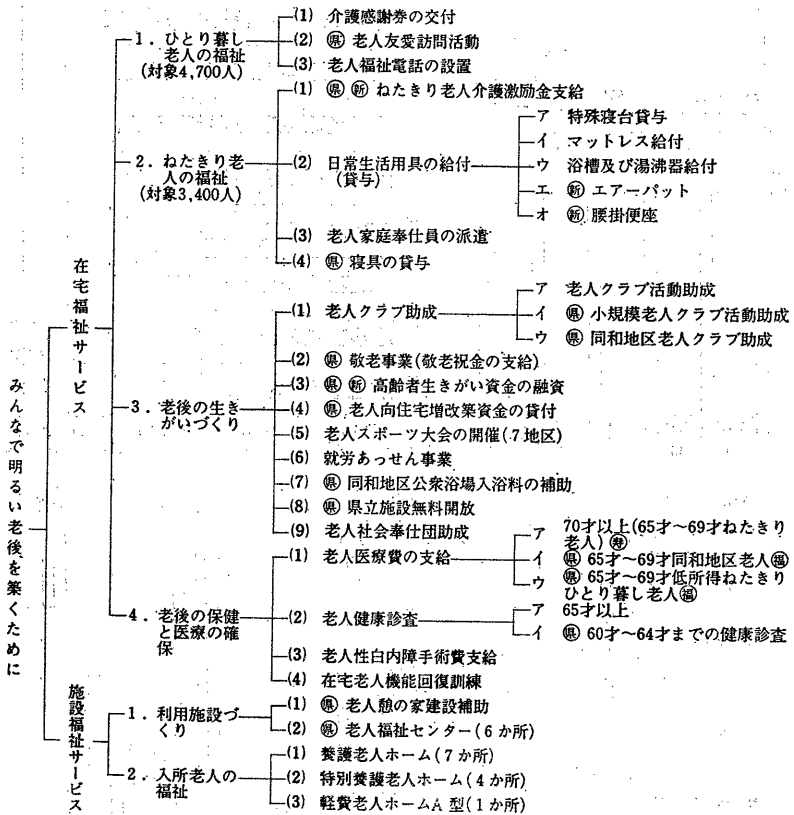
さて次いで本県本市の福祉行政についても若干論述しておくことにする。

これらはすでに、滋賀県老人福祉課が出された事業計画なり、この予算(昭五一年四月)を基本に、その大要をみることにする。

まず、その手はじめに、今日守山市における老人福祉の現況(付・資料①②)をまず見ておき、それから今述べた事業計画に移ることにしよう。

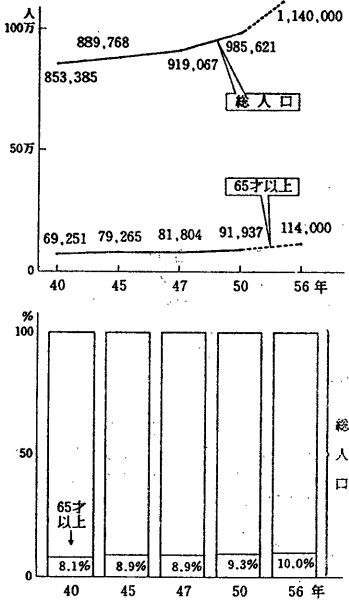
付：資料

① 老人福祉対策の状況（昭和52年度）

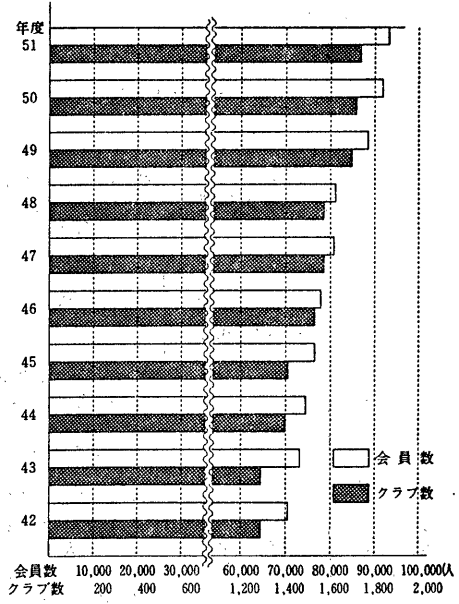


付：資料

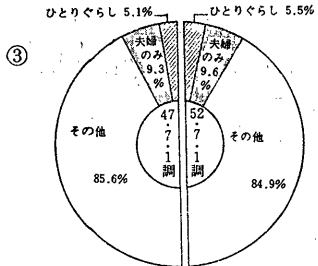
②



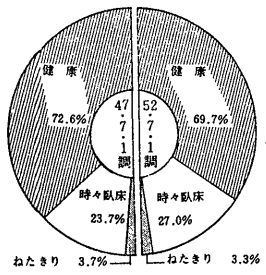
④



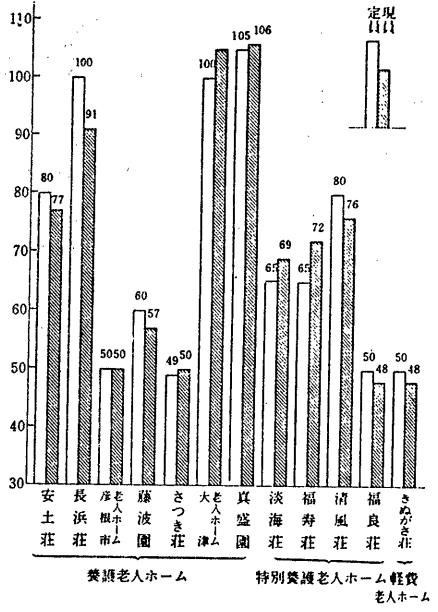
世帯構造の変化



健康状況



⑤

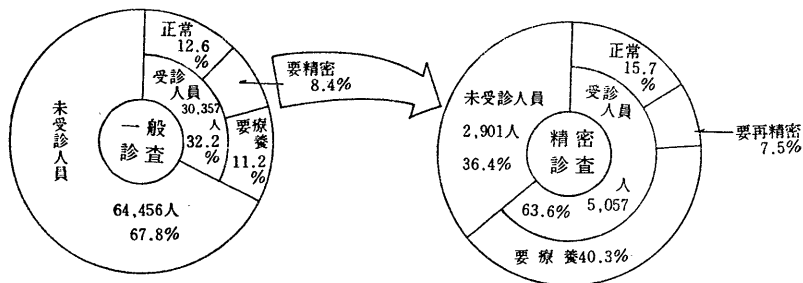




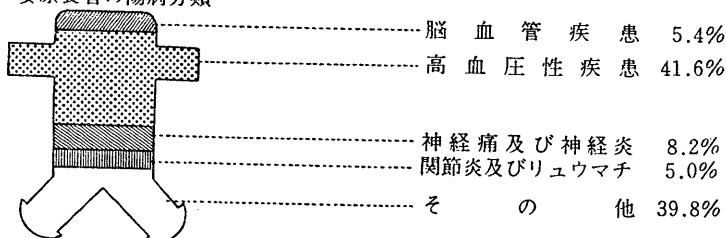
付：資料

⑥

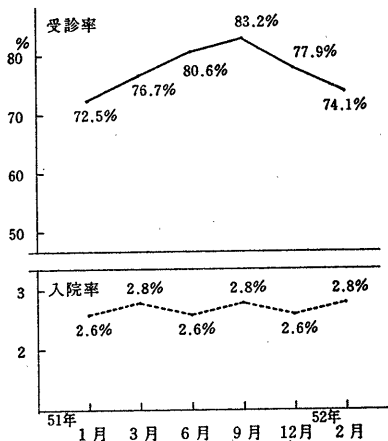
小域における新しい試み



要療養者の傷病分類



⑦



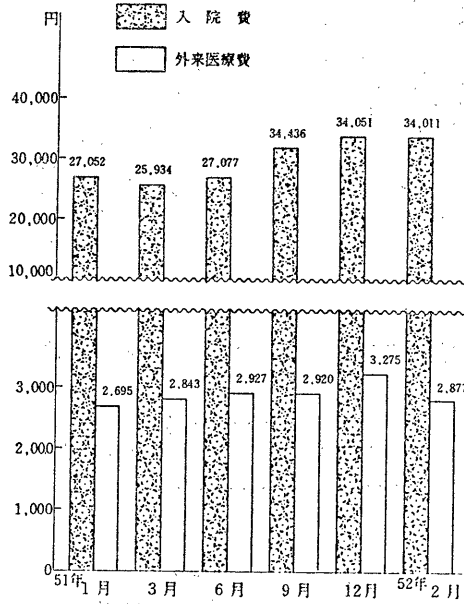
(注)

$$\text{受診率} = \frac{\text{受診件数}}{\text{老人医療対象者数}}$$

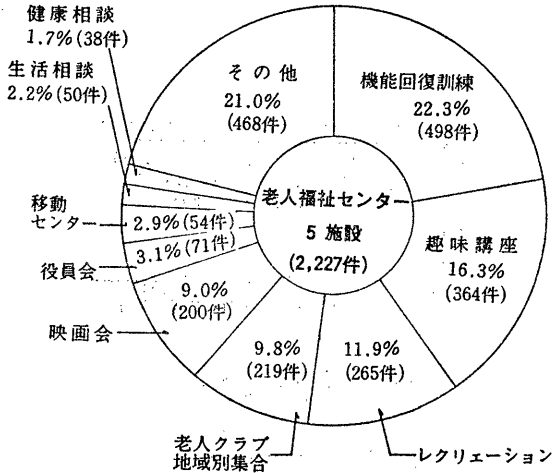
$$\text{入院率} = \frac{\text{入院件数}}{\text{老人医療対象者数}}$$

付：資料

⑧



⑨



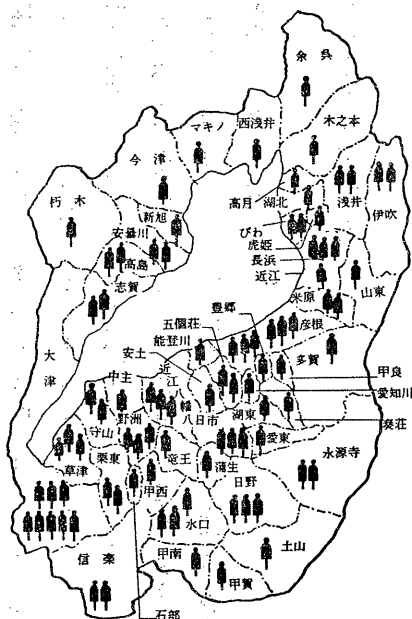
付：資料

⑩

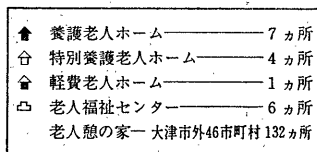
年度 区分	49 年	50 年	51 年
特 殊 寝 台	8 台	5 台	5 台
マ ッ ト レ ス	17 枚	19 枚	14 枚
浴槽・湯沸器	2 組	2 組	2 組
便 座	—	—	9 個
福 祉 電 話	39 台	70 台	28 台
寝 具	761 組	677 組	592 組

小域における新しい試み

⑪



⑫



この計画書がまず、われわれに関心を向けさせたのは、次の文章である。つまり、「今日問題はまさしく経済的にし、社会的にも弱い立場にある人々の福祉を優先させること」だと説いている点である。先きにみたように、今日の老人福祉の現情が、必ずしもこれから迎えようとする異様な事態である、人工長寿時代に対応できるものであるか、否かは、きわめて問題に後に残しそうである。これは、本書が素直に述べているとおり、「老人の need」を満足させるには至っていない」といい。そこでこれらの反省点をかえりみながら、昭和五十一年度の予算には基本的に次に挙げるような三つの重点施策を、この問題解消のために挙げている。

即ち 1、所得の保障としての年金。

2、医療。（なお昭和51年10月1日より老人医療支給制度実施をみた。）

3、住宅の確保

差し当り、その特長としてその基礎調査より、四千七百人に及ぶ独居老人の対策に、それに三千四百名とも三千五百とも言われているねたきりの老人のそれに重点が置かれているとおもう。それから説明しておきたい。まず、その独居老人への施策では、主に三つの柱から成り立っていると言える、一つは、老人介護人への感謝券交付を主とする事業これの充実を計ったもので、近隣の協力者をはじめ、老人の介護の任にあたるものを依頼したり、それらの行為に対して、ボランティア（無報酬）ではなく感謝の意を表わすカンスマーである。それに第二の柱は、老人友愛訪問制度である。これは痛ましい事故を未然に防止するためのもので、地域からの孤立、あるいは心の不安を除去しようというもので、地域住民の善意で結成されたものがある。従ってこの制度のP・Rと活動の活発化を目標とするための予算化で、もって地域福祉の向上を計ろうとしたものである。

最後に、老人電話を挙げることができる。これは先の友愛訪問に関わるもので、老人の安否を確認し合うもので、とくに緊急時の連絡のため、さらに孤独を解消するものである。先にわれわれは、守山市の電話の普及についてふれたが、引きつづいてその増設に注がれているものとおもう。

次は、ねたきり老人の対策であるが、まず主旨は家族の介護の負担を省力化すること、次に老人ホームヘルパーへの適正なる配置を、さらには処遇改善の充実にあろうかとおもう。

まず第一の柱は、老人家庭奉仕員制度の充実で、とくに老人介護を任とするホームヘルパーの果たす社会的役割が大で、それへの処遇善を求めて予算化したもの。また経済的な支障のある独居老人の介護福祉の向上につとめようとするものである。

第二は、日常老人の生活介護上必要な特殊ベット、マットレス、それに湯沸器、バス、室内浴槽等の住宅用具の給付（貸与）事業の充実を計ろうとするもの。これは特に身心の障害を有し、しかも長期間にわたる障害老人のケアのために、つまり人手を要する低所得の老人の身体的機能の低下の防止と、その機能の回復を計り、介護者の介護の省力化をねらったものである。

#### IV 新しい試行、改革 (innovation) とオピニオンリーダー (opinion leader)

今回われわれの試行した研究の課題とはその目標は先に述べた如く、来るべき「人工長命時代とその社会」備えて、とくに老人とともに生きてゆく社会 (ecological system) の仕組とそれを支える運動にあった。わけてもその一つ、老人福祉サービスのワンドア (onedoor) 化を実現しようとするものである。またその社会実験ともいえるよ

うものだ。ともあれわが国における、この来るべき「人工長命社会」や「人工長命時代」はヨーロッパの高令化社会の中でも極く僅かの国しか経験していないがようやくこれに突入した社会事象で、従つてまたこれまでの経験でこの社会に対応しようというのでは対処しきれものではない。未知数の難問をかかえることになる。つまり、これまでの知識やそれに関する情報では十分でない問題に直面するからである。したがつてまた、この時代ほど東洋の生活哲学（共存）を必要とする時もないからだと考えたからである。

そこでわれわれはヨーロッパの先進国を範としながらも、日本人による日本人のための老人福祉をどうしても実現させねばならない問題、即ち独特の東洋的エコロジカル、システムを試案し、かつまた試行しなければならぬ使命があると思つた。

そこで、われわれは現地踏査より、あえて「もりやま文化」を支え、それを担つてまた「もりやまびと」に興味をもち、彼らがわれわれのいう与論の担い手―即ち改革者（innovator）とそのオピニオンリーダーであるかを検証しようとするものである。

ところでまず、その試みへの仮説ともなり得よう理論と若干の専門用語とを説明しておくことにする。

# (1) イノベイション (innovation)

元来、ここで用いるイノベイションなる概念は社会心理学、とくに「マス・コミュニケーション」の領域で用途する専門用語である。ただ一般的通常語としては「文化人類学」の領域で使うところの語意だが、思想や行動に関する既存の存在形態とは若干質的に異なる新規 (new) をあらわしたことで「新しい思想、新しい行動」とかである。

さらに狭義の意味に用途すれば「発見」「発明」、さらには「伝播」などの意をもつ、ときに R・K マーティンなどは「革新」と呼んで、ある社会事象を捨象化している。

次に欧米の社会科学を学習する学生らに重宝がられている。

George A. Theoderson, AG. Theoderson, A. Modern Dictionary of Sociology

(Methuend Coltd, London, 1970)

の二〇四～二〇五の“innovation”の頃から若干それを補足しておく。

これによると、まず第一はことばの用途の限定を「文化」(culture)に関する基本理解として、物質的なものであれ、それ以外の文化事象であれ、新しい要素とか、新しいパターンなどの認識とその発展を示唆することばとして用いられているということだ。従ってまたかなり巾の広い意味を含んでいることを指摘している。さらにはまたその「発見・発明」の度合(量質)に注目して、かりにそれが極少(minor changes)であつてもそれを“innovation”のカテゴリーの中に含むことを前提にしながら、以下、点をそれに加えている。即ちこの“innovation”という語は常に(1)現存する文化のある知識を表現、もしくは示唆する語として用いられていること、(2)たとえば、それが古い文化の特質の新しい結合(combination)を必要とする場合、あるいは再解釈(reinterpretation)を必要とする場合とか、もしくは新しい文化の特質をつくり上げる場合、複合体(complex)を必要とする場合かだし、また古い諸々のパターンから新しいかつ創造的な諸パターンへその要素(element)の選択を必要とする場合であり、いずれにしても“existing culture”の知識に用いられているということだ。(3)最後にこのことばが文化的接触を通じて知識の“reexamination”再チェック、これによって大きく影響をうけてきた用語で、それ自体

より高いイノベーションとしての一つの刺激となっていることを等々を挙げている。

その他この用語には異った意味をもったものであることが、「社会学辞典」中にみるが、それによると古代ギリシャのキニコス学派のよってたった主張つまり、懐疑主義的なアイデアのシステム(Cynicism)とそれに伴った彼らの世界観ないし、生活観(生活の態度)といったものを意味している。さらには逆に正統な価値体系や支配的社会に対して懐疑的もしくは否定的な態度をとる「私的生活への自閉」もしくは「エゴイスティツは自治」を主張する人々の理念や態度をあらわしているとしている。

そこで、われわれは最下のところ、この「イノベーション」をK・R・マートンの説明に用いた概念、つまり「新しく何ものかを創造しようとする意図」と解釈して、「新時代へのオピニオンの担い手」を含めて広く「新しい思想」「新しい行動」と使用上の限定をしておくことにした。

さらに、我々の関心事は上記の新しい思想や行動の担い手たち、改革者(innovator)に焦点を合致させる必要がある。それは一体誰が社会改良(世直し)の担い手となるかと無関係ではないからだと考えたい。少なくともわれわれが追求する目的は何をおいてもこの見直しの良識(エリート)とその担い手である。ことは面々述べたところである。

ところで本論におけるこの「オピニオンリーダー」はただに本論の担い手として評価するのみならず、優れて本論づくりに最も必要な意志決定の影響者と考えたからだ。つまり社会改革に伴う人的資源のそれに大いに期待するところである。

## (2) オピニオン・リーダー (opinion leader)



この概念も然り、社会心理学（マス・コミュニケーション）のテクニカル・タームの一つだが、そして、現代社会、これは複雑な“Rapidical social change”の社会と言っても少しも過言ではないがむしろ大衆化された今日の社会はこれまでのコントロールされてきた古い文化やその規制、たとえばカストム、ノルムなどなど、また広く一般にモラル（道德）といったものがその社会を構成するメンバーに多かれ少なかれ、その行動を規定し（Behavior standards）、彼らの行動規準を支えてきたといつてよい。ところが、その古い文化が Rapidical social change により行動規準の喪失に伴ないアノミーがおこる、その際新しい規準にとって代わろうとする。ところでそのそれらを支えるコンセンサスがおころうとする場合きわめて人為的であつ、それに基く与論（public opinion）と無関係でないことが指摘されている。つまり、その与論の形成において最も大きな影響を与え役割を担うものはマス・コミュニケーションなканずくマス・メディア（mass-media）の役割である。しかも情報が人々（住民）に流れそれを受けとつた場合、その内容を判断して意志の決定を行なうとき、そのファクターとなるのはむしろマス・コミュニケーションのメディア（内容）ではなく、人・即ち人間的な媒体がより多くの役割を担うということである。その際意志の決定に大きな影響を与えた人物こそオピニオン・リーダーと名付けた社会変革者なのである。

若干先の辞典を参照するとそのリーダーとは“the fluoridation of water”（水の飲料化）これを挙げて以下に述べるような若干の説明をつけ加えている。(1)新しい思想（アイデア）をもった人物でしかもそれによつて与論をつくる重要な人物だということだ。(2)必ず彼は与論を共有する同一の地域内に居住する人物を規定している。(3)しかもこの与論はその共同体の住人にある重要な影響を与えるようなものであること、即ち彼のもつ新しいアイデアなり思想、信念ならびに行動が本論として他の住人に影響を与えるようなものをもつ人物であること。(4)もし仮り

に彼のいづく新しい思想や行動がアドバイスであれ、情報であれ、他の住人がそれに同調するといふものでなければならぬ。しかも(5)彼は必ずしも地域内のボスや然るべくリーダーの地位をもつ必要もない一般人でいいということ、等々を挙げている。

承知のとおり、このオピニオン・リーダーの研究と意志決定の理論的研究の成果はカットとラザースヘルド共著「情報の二段の流れ」(P. E. Lazarsfeld & E. Katz, *Personal Influence-2step Flow of Communication* (1955). P. E. Lazarsfeld, B. Berelson, *Peoples Choice* (1944) にみられる「投票行動」の分析によるものだ。個々人の最終の投票行動、結局誰に投票したか? を解明しようとしたものだ。問題の所在はその意志の決定に影響を与えたものは何か、これを研究しようとしたものだ。結果はラザースフェルドの“The Peoples Choice”(一九四八)で発表された。方法は一九四〇年米国大統領選挙十一月を調査したもので、その七ヶ月前から住民の投票意図(vote intention)「私は〇〇党××氏に投票する」「私は〇〇党××氏に投票した」調査票を用いて、彼らの投票意図と投票との間にどんな関係があるか? つまりマス・メディアがどんな効果をもつかを求めたものだ、そこで試みたものは同一の人物に数回これをくりかえす法パネル法(pannel technique)を用いて調査した。

ところが、事実とは以外なことがこの調査から判った。それがラザースフェルドとカツツの「コミュニケーションの二段の流れ」のテーマで、一つの流れは情報がマス・メディアから個人に直接流れる場合と、もう一つはマス・メディアと流れとの間にワン・ステップ何かが介存して個人に達するという二段の流れを明らかにしたものである。つまり、後者の流れ、その間の介在するワン・ステップとは彼らが命名した「オピニオン・リーダー」というものだ。つまりここには人間という媒体メディアが存在して、彼らがフロアーにある決定的な影響を与えるという仕組みを

発見したことである。

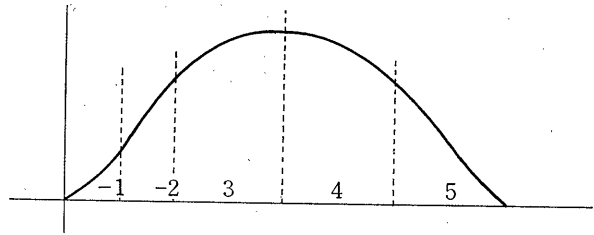
ここにマス・コミュニケーション理論では彼らの研究の成果マス・メディアの効果がパーソナルな効果（オピニオン・リーダーによるパーソナルコミュニケーションの補強）の投票者の意志の決定に大きな影響を与えたことになるであろう。むしろこの結果は新しいコロロジカル・システムをつくる場合、即ち来るべき「人工長寿社会」に対する民度の高まりと比較的関心の低い住民たちへの態度変容（改革）に有効な仮説と考えたからである。

くりかえすまでもなく、この仮説的人的影響はカツやラザースフェルトの報告の他に、影響のパターについては「ロービア研究」ニューシャーズ市のロービア町における調査、人口千人のインターパーソナル (interpersonal) と情報行動の研究から、またパーソナル、インフルエンス（人的影響）は、先に列挙したラザースヘルトとカツらの意志決定についてのイリノイ州の人口六万のデイクダー市の調査、さらには同じくラザールヘルトとベアソン (Berselson) らの行った「大統領選挙」の投票行動（エルミラ研究）、それにもう一つ、カツその他コールマン・メンツェルらの行った新薬の浸透「Social Relations and Innovation in the Medical Profession 1955」通称「ドラッグ・スターデー」等々で十二分に検証された仮説ととていい。

### (3) ソーシャル体系システム

次いで、われわれは情報の定着について述べておく、これは E. M. Roger の “The Diffusion of Innovation” (1962) によるもので、彼はそのオピニオン・リーダーの解析から情報固定の五段階を指摘した。言うなれば、これは採用のプロセスを示したもので、ある情報が個人の availability と predisposition つまり接触・知覚・記憶がその個人の集団的規制によってより選択的に機能することに目を向けた。即ち個人はまず情報に接触し、それを受

図表 (9)



- ① innovator
- ② early adopters
- ③ early majority
- ④ late majority
- ⑤ laggers

けとり、個人にとって重要であるか否かを判断し、選択し、仮りに重要なものならばそれを採用するというプロセスが predisposition の段階として通過することになる。こうしてある情報に対しての自己の意見なり態度を固定させるに至る。

ところで、先のロジャーズはこの採用に至るプロセスを (1) awareness (認知) (2) interest (関心) (3) evaluation (評価) (4) trial (試行) と (5) adoption (採用) に各段階を分類して採用に至る心理的社会的メカニズムを説明した。

さらに加えて筆者らは情報の awareness から adoption に至るプロセスの情報採用の時間的差異に注目して、つまり、あるものに個人間時間的差異があることを五段階に分類したことである。これを (1) innovator (2) early adopters (3) early majority (4) late majority (5) laggers と、社会体系が述べられている。(図表(9))

ところで、われわれの求めるオピニオン・リーダーの存在が、第一の段階の情報採用者 innovator に存するのではなく、むしろ(2)の early adopters にオピニオン・リーダーが存在するということだ。

## V おまがり老人会におけるオピニオンリーダーとその後の活動

最速、われわれ速野研究班は地元おまがりのオビニオン・リーダーの発掘にとりかからねばならなかった。まずその方法だが、必須のおまがり老人会への接触である。これは、すでに「踏査予定表」で述べた通り、第三代会長の好意的なはからいでわれわれプロジェクトのメンバーが、五月の例会以降数回老人会で連続してプログラムをもつことになったことを述べたが、これを転機に展開することにした。結果、第一回目つまり五月例会には吉田や、筆者などが、吉田氏は「老人と健康」について講演をさらに筆者らは「老人の三つの顔」と題して昔話の中から「かぐや姫」「桃太郎」それに「浦島太郎」をあげ、これらの昔話から抽出される出会い（邂逅）と離別、つまり、喜びとかなしみの二相を、さらに「浦島太郎」のそれからは、短縮されない社会的距離をテーマに孤独（マージナル・マン）のうれしいの相を、山口研究室の卒論研究生や三回演習の学生らの協力を得てペーパー・クラフトを（紙人形）を用いて行った。

幸い、これらの視聴覚を用いたアプローチは会長の弁によると老人層より大変うけが良かったという評をもらった。即ち接触の方法はこうしたアプローチを通じて第一の目標は調査以前の頻ぱんに老人クラブの会員と接触をすることであった。しかも、その条件をなすものは唯ひとつ、第一次的接触“face to face”（C. H. Cooley, primary group）“intimate distance”（E. T. Hall, The Hidden Dimension, 1966）の確保である。次いで、クローリーのいう“intimacy association”つまり第一次的接触の結果おこる人間相互の心理的・社会的感情、親密性（intimacy）換言すれば“we feeling”という一体感である。さらに第三は、その要件を“co-operation”つまり、なんらかの相互の協同作業（協働）、以上述べた人格形成にとって第一次的集団であるプライマリーグループを形成することであった。

そのため、筆者らをはじめ山口研究室の学生らは、例会（老人会）前凡そ一時間近く神社（二ヶ所）の境内の草とりや会館の掃除などの共同作業に老人たちと一緒に参加した。しかもそうした作業を通してどういふ人々の関係（ネットワーク）が存在するか、またはその準拠集団（Positive Reference Group）などを探ることにした。こうしたあらゆる接触を通じて村人たちの「よそ者観」の一掃に努め、今後のオピニオン・リーダー探しの基礎調査への積極的参加が得られるよう心掛けた。また例会中には出来るだけ、村の秩序をおかさぬよう配慮し、年寄りの中にいれてもらってプログラムに参加するようにした。これは例会への出欠を確認（チェック）したり、態度や意見などを身近かに聞くためネットワークをはじめ情報の採用過程の階層を区分するためさらに次いで本格的なオピニオン・リーダーの調査票（老人意識調査）を作成して、老人クラブの会員、とくに常時出席者に次いで老人クラブの全員を対象に調査を実施することにした。

この間、会を重ねる毎に我々が気付いたことは、第一に老人クラブの会員の出席率が高まってきたことだ。因みに、これはクラブの会長よりの話しだが会をおう度に二、三人は増えてきていることだ、われわれの記録では、つまり新老人会、当時（昭五十二年二月一日）常時出席するものの数が平均二十五人、これが本プロジェクトの第一回目（三月一日）のアプローチ地元老人ホーム経営者、岡田氏の講演時には同数の二十五人、それが次の六月例会（吉田、山口）には三十二名、七月の例会では三十七名、八月、四十名と次第にその数を増加していることがわかる。そこでこれらの増加が何によるものか、会長のさそいによるものなのかそれとも、我々の求めているオピニオン・リーダーの作用なのかを調査してみると会長による口こみで増加しているのではなく、他の会員のヒューマン・インフルエンスの結果であることが判った。そこで、この新しい会員つまり余り出席をしたことのな

い会員に誰がさそったのか、さらにそのさそいへのオピニオン・リーダーのヒューマン・コミュニケーションなどを調べて、それがまぎれもない early adoption の階層にいるオピニオン・リーダーであることを発見した。彼らはただに例会に会員をさそったのではなく自らがその例会に出席し、われわれの伝える情報について個人的にこれが新しい (new) 存在を認知 (気付いた) 認知 ↓ 関心 (より多くの情報を集める「確かめよ」という情報追求行動) ↓ 評価 ↓ 採用に至るまで adoption process を通じて他の会員に接触し会の模様を話し彼らに関心を持たせ、次いである態度に変化 (Activation) をおこさせ (evaluation) つまりあるパーソナル、インフルエンスに情報をもとめるといった行為を生ませるに至ったところにオピニオン・リーダーとして early adoption を見たい。このラザースフェルトのいう仮説がそのままこの村の老人会にも当てはまることをみつける結果になった。

さらに、このオピニオン・リーダーには理論的に “around prayer” ではなく、各々の意思決定や行動領域において、そのオピニオン・リーダーが違うということも調査から判っている。マス・メディアから流される情報の内容によって、それをどう受けとめ関心を抱き、かつまたそれを採用するから個人によって他人にそれを流す流れに影響を与えていることになる。こうして、次の階層の early majority や late majority につながるがソシオメトリ (sociometry) を明らかにしてくれた。

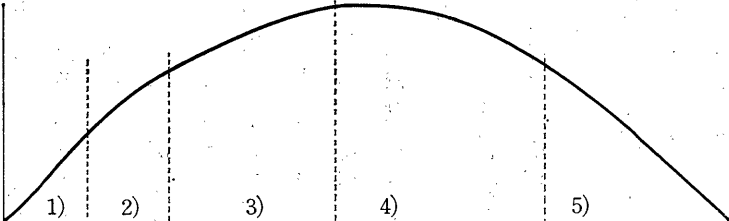
今、若干それらの情報を元にして各階層にしかもアプローチの各階層毎に票にまとめてみることにしよう。そこで便宜上、いくつかの段階 (ステップ) に分けてそれを見ることにしよう。さて、第一のステップは教育委員会のすすめで北公民館にて I K 氏北公民館々長らと会う。このことはすでに「Ⅲ章の踏査に入るまでの地元への接近とその経過」で述べたがそこに列挙した面々はインベリションランカーのオピニオン・リーダーと言うことができ

る。次いで第二の段階では専ら、この地区：速野学区洲本大曲の年寄り衆の中に、各々のイノベーションとオピニオン・リーダーをさらに発掘の次の段階を「老人意識調査」までとして次に述べるポイント(一)～(四)として、専ら老人会、明の輪会の例会中の出度や集会中の態度、それにあらゆる意見などを、注意深く観察して、イノベーション・ランクⅠ・Ⅱ・Ⅲを判断した。そのポイント(1)は、最初にわれわれプロデュクト・チームが地元に入り住民(老人会々員)との接触もしくは紹介されたときの老人たちの反応からである。さらに(2)は、岡田(四月一日)吉田(五月一日)両氏山口ら(心と体の健康)の導入と最初の「人工長命時代」の新しい意見への接近である。次いで、老人会長のとりはからいで(六・七、八・九月の例会) 四回連続の例会を担当することになり、山口(六月七月例会)をはじめチームの面々吉田・山口が二回づつアプローチした。そこで、これへの会員の関心度に注意を払い、その関心度から、イノベーションとオピニオン・リーダーのランク付けを試みたものだ。事実、昭和五十二年二月一日「朋の輪」と名称を一新し老人会を出発。この時の平均出席者二五名、第一回(三月二日)のプロデュクトチームの初回時の接触時二五名、これが六月の例会三二名、七月例会三七名、八月例会四〇名と会員の出席率が高まってきた時期で会員の働きかけがあったと察する。その担い手こそこの時期のオピニオン・リーダーの役割であったろう。最後第Ⅲの段階のステップは調査時の、それで、もっぱら戸毎に訪問してアンケート調査をこころみ、その面接時の反応からそれを判断することによって得た判断だ。

今これらの資料にもとづいて暫定的なイノベイダーをランク付けしておく。あくまでもオピニオン・リーダーの発掘に主眼をおいたため求める階層を次の三つのみ限定した。即ち(1)イノベイダー、(2)イアリー・アダプティター、(3)イアリー・マジヨリティとである。しかも、先に示した如く、部落への入植から調査まで三期に分けた関



図表 (10)

					
	1)	2)	3)	4)	5)
	innovator	early adopters	early majority	late majority	laggers
ステップⅠ 段階	Yk(m)  Oti(f)	Yt(m)  Eha(m)			
ステップⅡ	Oti(f)	USu(f) Yt(m) Eha(m) Oi(m) Yfa(f) Ka(f)	多数	多数	
ステップⅢ	Yk(m)  Y		多数	多数	
ステップⅣ		Yk(m) Yfa(f) Ka(f) U.Su(f)			

- 1) ステップⅠ：はつの老人会有志との接触  
 2)    ◇   Ⅱ：本プロジェクト・チームによる「人工長寿時代」講演会より  
 3)    ◇   Ⅲ：「老人生活意識調査」より  
 4)    ◇   Ⅳ：最終決定者

係から、それぞれの期で発掘できたオビニオン・リーダーを求めることにした。

図表(10)はまさにそれを示したもので、これにそって説明を加えてみることにする。

はじめにステップⅠだが、これはくりかえすまでもなく地元に入り、老人クラブの代表者(会長)から様々の情報をあつめるための準備段階であつて、直接間接にオビニオン・リーダー発掘の糸口となるものである。今(1)のイノバイターから、(2)アーリー・アダプティーター、さらには(3)のアーリー・マジョリティの毎階層に働いたオビニオン・リーダー、つまり、(1)から(2)のオビニオン・リーダー( $O \cdot L$ )を  $YK(m)$ ,  $Ou(f)$  の二名男・女一名づつさらに(2)と(3)の  $O \cdot L$  を  $Yr(m)$ ,  $Eha(m)$  の男子二名を挙げた。

次いで、Ⅱのステップでは、つまり、本プロジェクトチームの通算四回にわたるプログラム(講演会…人工長命時代の老人問題)を消化することから得られる情報によるオビニオン・リーダーの発掘で各講演会を通じてそのプログラムの内容、つまり人工長命時代への反応をしらべ、それに対するかまえ(readiness)から  $O \cdot L$  選発掘の要件とした。したがって、ここで(この段階での)  $O \cdot L$  は、四回のプログラムを終了した段階で、速野グループの会合によって決定したものだ。それによると、(1)と(2)への  $O \cdot L$  を  $Usu(f)$ ,  $Ka(f)$  と各々三名を選ぶことができた。当然六名、男性では  $Yr(m)$ ,  $Eha(m)$ ,  $Oi(m)$  それに女性では  $Usu(f)$ ,  $Ka(f)$  と各々三名を選ぶことができた。当然のことだが第一回目のステップⅠより量的に  $O \cdot L$  の増加をみた。さらにこれらの資料より選んだ  $O \cdot L$  がどう下部の階層に働きかけたかをチェックするため、しばらく追従調査(ファローアップ、リサーチを通じて、オビニオン・リーダーの適・不適をしらべることにした)。

これが次の時期である「老人生活意識調査」の実施である。この調査はもとより、老人会つまり、六五歳以上の

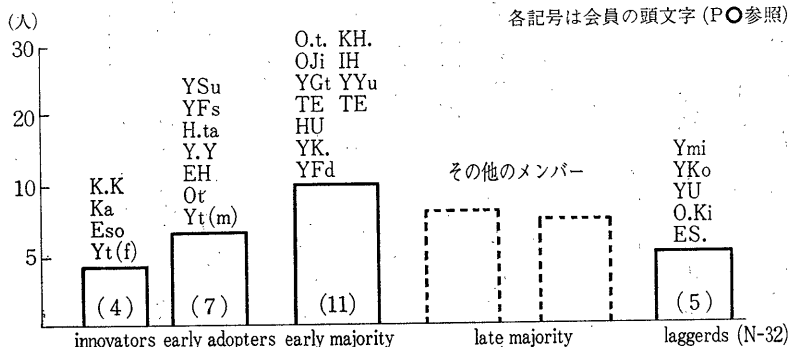
老会者を対象としたもので、できうるならば、全数調査（しつ皆調査）を実施するもので第一義は広くO・Lの発掘に供しようとしたものだ。その上筆者らは上記の段階Ⅱで発掘できた、O・Lの資質をチェックするため、それには特別に訓練された調査者（学生）と筆者らが、それに当ることにした。調査は九二ヶ月を要し、検討した結果、次の図表（11）に示すようなO・Lをうることができた。（1）から（2）のO・Lとしては、つまり、最も我々のプログラムに興味をもち、（2）のアーリー・アダプティターに影響を示したと考えられる人物にYK(m)（後第四代老人会長となる）を挙げることができた。また（2）から（3）の階層へのO・Lは、すでにステップⅡで発掘された人物とほぼ同様で、僅かに、ESO(m)氏を加えた程度に終った。

尚その他、おまがりに隣接する地元からも、有力なオピニオン・リーダーを発掘することが出来た。たとえばR.E.（元市議会、現守山市老人クラブ会長）だ。

さて、速野学区より、とくにコントロールグループとして選んだ、おまがりでは上に挙げたようなO・Lの存在をみる事が出来た。しかもこれらのO・Lがみた、先きに述べたO・Lの資質を充分兼ね備えていることが、判った。中でも男性ではYt(m), Eha(m)の二名、女性ではOh(f), Dsu(f)の各々二名が、最も有力なオピニオン・リーダーしかもさらに彼らの下に数名のグループがあり、下部の階層、（3）のアーリー・マジョリティに影響を与えるべきオピニオン・リーダーとして、機能していることを確めるに至った。もち論これは村の生活を規定するあらゆる社会関係の集約と理解して良い程、あらゆる社会関係の多重構造のネットワークと考えて良いとおもう。

そこで、われわれは次いで、これらの発掘できたオピニオン・リーダーの資質の後づけとして一つのワークシッブを考案した。それは、本プロジェクトの主任教授である吉田寿三郎氏の著書『日本の老残』をこのオピニオン・

図表 (11)



リーダーに贈呈して一読してもらうことだ。しかもこの計画の実施が、オピニオン・リーダーの資質をチェックする確実な保証となるものと考えた。氏の著書一五冊を購入し老人クラブの会長より各オピニオン・リーダーに贈呈してもらった(昭和五十二年九月)。

この間、おまがり最大の O・L Yt(m) Eha(m) がいるが前者は、婦人会の社会教育を地区で担当しており、その会合にこの「人工長命時間と老人問題」なるテーマで各地区に会合をもって大いに啓蒙運動に努めてくれた。他 Eha は、老人クラブの会長という地位により部落はもとより、市の老人クラブの会合にて先きの O・L Kai(m) (市老人クラブ会長) や IK(m) (公民館長) らと共にこの方面の啓蒙に努めてくれた。

以来、部落内の老人クラブの集会を開催する毎度に、老人たちの関心の高まりが認められるに至った。もとよりこれは先きの計画つまり吉田氏の著書の影響と考えるべきで、オピニオン・リーダーの働きが効を奏していることを物語るものといつて良い。即ちこの結果は先きに挙げたオピニオン・リーダーの中から、自主的に学習会を希望する声が出それの気運が高まってきたことだろう。従って速野学区グループの研究者たちが、本プロジェクトの十月例会に発案し、この声を何とか生かすた

めの検討をくりかえした。その結果老人クラブの会員の主体的参加型の発芽とみて、その進展を見守ることにした。ところがついに、本プロジェクトの研究員  $Uhi(m)$  氏や  $Yi(m)$  氏  $Eha(m)$  を中心に学習会「人工長寿時代とその社会に備えて」を、おまがり老人会よりはじめるまでに至った。詳細は「地元への接近」にてすでに、ふれたところだが、吉田氏の著書『日本の老残』を参考に老人用のカリキュラムを組んだり、そのためのカリキュラム委員会を組織したり、企画や実施に当たっての組織（準備委員会）を部落の全構成員からなる代表者の準備会を計画したり、はたまたテキストに至るまで準備がなされた。もちろんこれはおまがり老人会副会長  $Ysai$  氏を中心としてすすめられたものであるが、数回のうち合せ会に筆者らもオブザーバーとして、参加させてもらってまったく老人会メンバーの自主的な運動として「老人用…カリキュラム試案」を作るまでに至った。終りにこの計画は「人工長命シルヴァプラン講演会」と名うって実施させるに至った。実施は昭和五十二年十月の例会を皮切りに五回を予定した。がその後若干の変更があり、結局第一回を十二月一日か十二月三日のいずれか、二回目、一月十七日老人会総会を兼ねて実施、三回目二月一日、四回目、二月十二日か二月十四日、吉田氏の講演会を予定、部落全体に呼びかけて開催することにしたねらいはこの時機を利用して、老人会より巾広く「婦人会」「エルダー会」「壮年会」「青年会」「子供会」その他の団体へ働きかける運動の輪を広げようとしたものである。最後の五回目二月二十九日か三月十九日のいずれかをと日程として決定した。

若干おまがりのオピニオン・リーダーについて、まとめをしておこうとおもう。たとえば図表(11)の示したような「おまがりのオピニオン・リーダー」のヒストグラムだが、とくにわれわれの注目するオピニオン・リーダーの存在は、アーリー・アドプターとアーリー・マジョリティの間に介存するオピニオン・リーダーで  $O_i, Y, Y_u$

TK, ES<sub>0</sub>, E<sub>h</sub> 氏のそれである。さらにその下部に存在している、YS<sub>u</sub>, H<sub>u</sub>, KK, KA など担当の影響力をもったオビニオン・リーダーであることが判った。唯その内僅かにオビニオン・リーダーの資質に欠く者も検討会の結果判明してきた。例えば、ES<sub>0</sub>氏だが O・L の資質に若干欠くところがあつて、オビニオン・リーダーから除くことにした。ただこの判断が適格であつたか否かは後にゆずることにしたい。

とくにおまがりの女性オビニオン・リーダーにも注目しておきたい。例えば Y<sub>h</sub>(G) 姉の存在だが、彼女はおまがり最大のイノベーターの一人でもある。そこで彼女を速野学区のウエルエイジングの研究員のメンバーに老人会代表として参加してもらふことにした。「守山ウエル・エイジング」の速野学区の代表として、地元婦人会代表と共に出席し、多に意見を述べ意見の交換に活躍してくれた。

さらにもう一人 KA(G) 姉だ。小柄だが活発で相当広い行動圏をもっている女性である。しかもその行動圏の広さは彼女の健康と自転車で、もちまゑの花づくり(仏花)とその出荷で、琵琶湖大橋を渡って対岸の堅田まで行商に出掛ける人物であるが、そのあい間をみて老人会で学習した問題をしらべるため市の図書館や公民館にかよい勉強しており、その旺盛な学習力を示している。

引き続きこれらのオビニオン・リーダーたちが次ぎに、弱って死ねない人工長寿時代をどう生きるかをめぐってどんな活動を開始するに至ったかを次ぎの稿で述べることにしたい。

〔つづく〕